

「共創」「経営視点」もとにアクション！ ヒーブの強み、今年も発揮へ

日本ヒーブ協議会・梶原織梨江代表理事



日本ヒーブ協議会（ヒーブ）は働く女性で構成される業種・業界の横断的なネットワークを特徴としています。「企業と生活者のパイプ役」という役割を發揮しつつ、その強みを活かして今後は、生活者・企業・行政の三位一体の関係を生活者視点から構築していく、という新たな役割の發揮が期待されるようになりました。生活者視点をビジネスで実践しながら、新しい価値を生んでいく、という活動の推進です。

このヒーブの方向性は、

二〇一八年度に迎えた創立四十周年の際に、ヒーブの価値を再確認する中で将来を描くことに取り組んだ成果として提示されました。

四十周年では、記念誌「Design the Future 生活者と企業」のこれからを描く」を発売しました。十年後の生活者・企業・行政の新しい関係、将来像をデザインし、共に創るデザイン型共創社会に向けたアクションを提唱したものです。

二〇一九年度は、その提唱に基づく具体的アクションを起こしていくスタートの年と位置付けました。

活動テーマは「三位一体のデザイン型共創社会に向けたアクション」ヒーブ視点の実践」です。「共創」と「経営視点」をキーワードに、生活者視点と経営視

点を併せ持つヒーブ視点をいっそう強化し、生活者・企業・行政と共に創る社会において、ヒーブがリーダーとして発信者になることをめざします。

キーワードの一つ「共創」に関連したアクションでは、昨年十二月四日に福岡市で、内閣府、男女共同参画推進連携会議との共催でシンポジウムを開催したことがあげられます。「男女共同参画社会の共創」生活者・企業・行政で創る九州の未来」と題したもので、めざすべき社会へ向けた現在の取り組み、その課題などを参加者とともに話し合いました。新春の一月十七日には大阪でも同様のシンポジウムを開催しました。さらに、この二つのシンポジウムの成果を踏まえ、

一月二十九日に東京で「報

告会」を開く予定です。ヒーブの「経営視点」というキーワードは、経営上の大切な物事を決める局面で、生活者視点、ヒーブの視点を提起していくことを意味します。

消費生活は大きく変化しています。四十年間のヒーブの歴史は、多様性に目を向け、働く女性の視点、ヒーブ独自の視点の重要性を積極的に訴え続けた歴史でもありました。

今年は、その歴史を踏まえ、今年度のテーマに沿って、「共創「経営視点」のキーワードを盛り込んだアクションを積極的に提起し、実践していきたいと思えます。その活動を通し、社会的期待に十分応え得るヒーブとしての取り組みを展開していきたいと思えます。